

# 『平家物語』の用語

——会話文の音便を中心として——

川野 絵梨

## 一、はじめに

鎌倉時代後期に成立したとされる『平家物語』は、その名の通り、平家の繁栄と滅亡を描いた作品である。『平家物語』の中では都を中心とした平家と、東国を中心とした源氏という二つの勢力の対立が描かれている。その対立について登場人物の会話文に視点を当てた言語の面からも検証してみたいと思う。『平家物語』より後の刊行であるが、J・ロドリゲスの『日本大文典』<sup>1)</sup>には、西と東で「良う」「甘う」などのウ音便と「白く」「長く」といった非ウ音便の対立があることを指摘している。そのような対立が、ロドリゲスの時代からさらにさかのぼって成立した『平家物語』の中にも見られるのかということを見ていく。方法としては、平家方、源氏方の登場人物たちの会話文から用例を採録し記述する。それによって、東国語と中央語がどの程度反映されているのか、または反映されていないのかを見ていく。

扱うテキストとしては、今回は「沙門覚一」の奥書がある覚一本を取り扱う。覚一本の成立は応安四年（一三七一）である。

用例の採録・分析においては次のようないくつかの問題点も存在する。

1、会話文と言っても、どの程度忠実に登場人物の言語が描写されているのか分からないということ。

2、今回扱う覚一本『平家物語』を書写させた明石覚一検校の言語の問題、すなわち彼のネイティブな言語と物語中の会話文の關係の問題。<sup>(2)</sup>

3、今回は覚一本を取り上げるが、他の写本での会話文の箇所がどうであるのかということ。

以上のような三つの問題が存在するが、本稿で取り上げる会話文の音便使用の調査を通して、覚一本『平家物語』においてどの程度言語の東西が反映されているのかを明らかにしていきたい。なお、本稿では紙幅の關係上、形容詞の音便についてのみ見ていくこととし、動詞の音便等その他の分析については別稿に示す。

## 二、調査方法

源氏方、平家方に属するそれぞれの登場人物の会話文における形容詞のウ音便・非ウ音便、ハ行四段動詞のウ音便・促音便の使用を調査する。(本稿で用いるのは、このうち形容詞のウ音便・非ウ音便である。)

採録に使用したのは会話数の多い登場人物で、平家方は**21名**、源氏方は**13名**である。以下にそれぞれの登場人物を生年順に並べた。生没年の不明な人物は未詳としてひとつにまとめた。<sup>(3)</sup>

採録に際し使用した本文はすべて『日本古典文学大系 平家物語 上下』(岩波書店、一九五九・一九六〇年)による。底本は龍谷大学図書館蔵本である。

平家方 **21名** (生年順)

平清盛 一一一八年

源氏方 **13名** (生年順)

源頼政

一一〇四年

平教盛 一二二八年

熊谷直実 一二三八年

平時忠 一二二八／一二三〇年

北条時政 一二三八年

平頼盛 一二三二年？

源頼朝 一二四七年

平重盛 一二三八年

長谷部信連 一二四七年？

平宗盛 一二四七年

今井兼平 一二五二年？

平時実 一二五一年

源義仲 一二五四年

平知盛 一二五二年

源義経 一二五九年

平重衡 一二五七年

平維盛 一二五九年？

足利忠綱 一二六四年

平清宗 一二七〇年

(未詳)

(未詳)

平経正

猪俣則綱

平教経

梶原景時

平貞能

渡辺競

平宗清

千野光広

平盛嗣

浅利義成

斎藤実盛

瀬尾兼康

六代

維盛北の方

### 三、平家方出身地域別音便出現状況

以下、出身地別という視点で形容詞の音便の出現を記述してみる。

#### 三十一 平家方西国出身者

平家方の西国出身者は19名である。

平清盛 平教盛 平時忠 平頼盛 平重盛 平宗盛 平時実 平知盛 平重衡 平維盛 平清宗 平経正 平教  
経 平貞能 平宗清 平盛嗣 瀬尾兼康 六代 維盛北の方

#### 採録結果

平家方西国出身者の会話文における形容詞ウ音便と非ウ音便の用例数を頻度順に示す。( )内の漢字表記は『平家物語総索引』(学習研究社、一九七三年)を参考にした。(以下同じ。)

#### ウ音便 延べ 96例

- 5例 (おん) ころやすう (御) 心安 ・ とう (疾)
- 4例 さうなう (左右無) ・ よう (良)
- 3例 くるしう (苦) ・ ありがたう (有難) ・ おもう (重) ・ くちをしう (口惜) ・ こころぼそう (心細) ・ したし

う(親)・はづかしう(恥)

2例 いどほしう・おぼつかなう(覺束無)・くらう(暗・闇)・こころぐるしう(心苦)・たのもしう(頼)・た

よりなう(頼無)・ふかう(深)・むなしう(空)・やさしう(優)・なう(無)

1例 あらまほしう(有)・いたう(痛)・いたはしう(痛)・いふかひなう(言甲斐無)・いやしう(賤)・うしろめたう(後)・うとう(疎)・うらめしう(恨)・うれしう(嬉)・おそう(遅)・おそろしう(恐)・おだしう(穩)・おなじう(同)・おほう(多)・かなしう(悲)・かろう(軽)・くやしう(悔)・こころづぶう(心強)・こころよわう(心弱)・ことあたらしう(事新)・こはう(強)・こひしう(恋)・せばう(狭)・ただしう(正)・ちかう(近)・つたなう(拙)・どほう(遠)・なさけなう(情無)・なさけふかう(情深)・なつかしう(懐)・はげしう(激・烈)・はやう(早)・まさしう(正)・もどかしう・やすう(安)・わるう(悪)・をしう(惜)

以下、平家方の会話文でのウ音便使用の一例として用例を示してみる。用例の該当箇所に傍線を付した。  
平教盛

「由なきものにしたしう成てて、返々くやしう候へ共、かひも候はず。…けさより此歎をうちそへては、既命もたえなんず。何にかはくるしう候べき。…」  
(卷一 一六六 4・6 「少将乞請」)

平経正

「先年下しあづかてて候し青山もたせてまいて候。あまりに名残はおしう候へ共、さしもの名物を田舎の塵になさん事、口惜う候。…」  
(卷七 一〇六 4 「経正都落」)

非ウ音便 延べ 38例

9例 なく(無)

3例 おなじく(同)・くちをしく(口惜)・よく(良・能)

2例 おほく(多)・おぼつかなく(覚束無)・かたじけなく(忝)・とく(疾)

1例 いやしく(賤)・こころうく(心憂)・こころぐるしく(心苦)・さうなく(左右無)・たかく(高)・はかなく・ふかく(深)・まぢかく(間近)・みだりがはしく(乱)・ゆゆしく・わすれがたく(忘難)・わるく(悪)

以下、平家方の会話文での非ウ音便使用の一例として用例を示してみる。用例の該当箇所傍線を付した。

平時忠

「ちらすまじきふみどもを一合、判官にとられてあるぞとよ。是を鎌倉の源二位に見えなば、人もおほく損じ、我身も命いけらるまじ。いかゞせんずる」

(卷十一 三五六―4 「文之沙汰」)

平頼盛

「年来の重恩を忘れて、今此ありさまを見てぬ不當人をば、さなく共ありなん」(卷七 一〇九―7 「二門都落」)

以下、ウ音便と非ウ音便の出現数を各人ごとに示す。

平清盛	ウ音便	14例	非ウ音便	8例
平教盛	ウ音便	6例	非ウ音便	0例
平時忠	ウ音便	2例	非ウ音便	1例
平頼盛	ウ音便	0例	非ウ音便	1例
平重盛	ウ音便	15例	非ウ音便	5例

平宗盛	ウ音便	10例	非ウ音便	6例
平時実	ウ音便	2例	非ウ音便	0例
平知盛	ウ音便	7例	非ウ音便	1例
平重衡	ウ音便	8例	非ウ音便	9例
平維盛	ウ音便	13例	非ウ音便	5例
平清宗	ウ音便	2例	非ウ音便	0例
平経正	ウ音便	3例	非ウ音便	1例
平教経	ウ音便	3例	非ウ音便	0例
平貞能	ウ音便	3例	非ウ音便	0例
平宗清	ウ音便	3例	非ウ音便	1例
平盛嗣	ウ音便	1例	非ウ音便	0例
瀬尾兼康	ウ音便	2例	非ウ音便	0例
六代	ウ音便	1例	非ウ音便	0例
維盛北の方	ウ音便	1例	非ウ音便	0例
<b>合計</b>		<b>96例</b>		<b>38例</b>

平家方西国出身者の会話文における形容詞はウ音便が95例、非ウ音便が37例でウ音便の方が多く見られる結果となった。これは先に示したロドリゲスの指摘における「西…ウ音便優勢」を裏付ける結果である。

### 三十一 ウ音便と非ウ音便の使用場面

次に平家方西国出身者のウ音便や非ウ音便が誰に対して、またはどのような場面において使われているのかということに着目する。この分析を通して、音便の使用が発話の対象者の位相によって変化があるのか、改まった場での会話で音便使用に変化はあるのかなどを明らかにする。

なお、ここではウ音便と非ウ音便の数が多く見られた人物である平清盛・平重盛・平宗盛・平重衡・平維盛の五人に絞る。五人のウ音便と非ウ音便の数はそれぞれ次のように見られた。

(1) 平清盛	ウ音便	14例	非ウ音便	7例
(2) 平重盛	ウ音便	15例	非ウ音便	5例
(3) 平宗盛	ウ音便	10例	非ウ音便	5例
(4) 平重衡	ウ音便	8例	非ウ音便	8例
(5) 平維盛	ウ音便	13例	非ウ音便	5例

以下、ウ音便、または非ウ音便を誰に対して使用したもののかを「対―」という形で表記する。また、その下にウ音便・非ウ音便の例を示す。( ) 内の数値は出現した数を表し、一例の場合は数値を省略する。特に対象者がいない場合はウ音便・非ウ音便の例のみを示す。(以下同じ。)

(1) 平清盛(一一一八〜一一八二)父は忠盛。ただし、白河院落胤説が有力。経盛・教盛・頼盛・忠度らの異母兄  
重盛・宗盛・徳子らの父。

ウ音便 延べ 14例…さうなう(左右無)(2)・とう(疾)(3)・うとう(疎)・したしう(親)・おだしう(穩)・お



もう(重)・かろう(軽)・ありがたう(有難)・いとほしう・なつかしう(懐)・やすう(安)

対 (一族) 平教盛…うとう(疎)・したしう(親)・おだしう(穩)

1 「新大納言成親、この一門をほろぼして、天下を亂らむとする企あり。此少将は既彼大納言が嫡子也。うとぶもあれしたし」[う]もあれ、えこそ申宥むまじけれ。若此謀反とげましかば、御邊とてもおだしうやおはずべきと申せ」  
(卷二 一六六・11・12 「少将乞請」)

対 (一族) 平重盛…ありがたう(有難)

(自己の心情) …なつかしう(懐)

2 「や、法印御房、浄海が申處は僻事か。…其外臨時の御大事、朝夕の政務、内府程の功臣有がたうこそ候らめ。…さればこそ、親よりもなつかしう、子よりもむつまじきは、君と臣との中とは申事にて候らめ。…」  
(卷三 二二五・17・13 「法印問答」)

ここでは「内府」は重盛のことを指している。重盛ほどの功臣はめつたにいないと述べているのである。

対 (一族) 平宗盛…とう(疾)

3 「さらばどうく出家をせさせ奉れ」

(卷四 三二二・11 「若宮出家」)

対 (平家一門) …やすう(安)

4 「其もの心にくからず。おもへば信濃一國の兵共こそしたがひつくといふ共、越後國には餘五將軍の末葉、城太郎助長、同四郎助茂、これらは兄弟ともに多勢のもの共なり。仰くだしたらんずるに、やすう打てまいらせんす」  
(卷六 四〇四・6 「飛脚到来」)

対 (家臣) 取次の者…さうなう(左右無)・とう(疾)

5 「なんでも、さやうのあそびものは人のめしにしたがふてこそ参れ、さうなふすいさんするやうある。祇王があらん所へは、神ともいへ、ほどけともいへ、かなふまじきぞ。どふく罷出よ」

(卷一 九六・7 「祇王」)

対 (家臣) 松浦重俊…さうなう (左右無)

6 「しやつが頸左右なうきるな。よくくいましめよ」

(卷二 一五五・16 「西光被斬」)

対 (家臣) 難波経遠・瀬尾兼康…おもう (重)・かろう (軽)

7 「よしく、をのれらは内府が命をばをもうして入道が仰せをばかろうしけるござんなれ。」

(卷二 一五八・2 「小教訓」)

対 前左少弁行隆…いとほしう・とう (疾)

8 「御邊の父の卿は、大小事申あはせし人なれば、をろかに思ひ奉らず。年來籠居の事もいとおもひたてま<sup>(ツ)</sup>しか共、法皇御政務のうへは力及ばず。今は出し給へ。官途の事も申沙汰仕るべし。さらばどう歸られよ。」

(卷三 二六〇・11・12 「行隆之沙汰」)

清盛の形容詞ウ音便使用は、息子である重盛・宗盛をはじめとした一族のものから、家臣に至るまで一族郎党に對するものである。

非ウ音便 延べ 8例…さうなく (左右無)・なく (無) (2)・ゆゆしく・まちかく (間近)・おなじく (同)・かた

じけなく (忝)・よく (能)

対 (一族) 平重盛…ゆゆしく

9 「重盛卿はゆゝしく大様なるものかな」

(卷一 一一四・10 「清水寺炎上」)

対 (一族) …さうなく(左右無)

10 「たとひ殿下なりとも、浄海があたりをばはゞかり給べきに、おさなき者に左右なく恥辱をあたへられけるこそ遺恨の次第なれ。…」  
(巻一 一一八 4 「殿下乗台」)

「おさなき者」とは重盛の子息のことで清盛にとつては孫にあたる。自分の身内の者が斟酌されて当然のところを左右なく恥辱をあたへられ」たと憤っているのである。

対 (家臣) 松浦重俊…よく(能)

11 「しやつが頸左右なうきるな。よくくいましめよ」  
(巻二 一五五 16 「西光被斬」)

ここは「いましめよ」という命を強めて言う意味で非ウ音便を用いたものか。

対 (後白河法皇) …なく(無) (2)・まぢかく(間近)

12 「や、法印御房、浄海が申處は僻事か。…我朝にも、ま近く見候し事ぞかし。顯頼民部卿が逝去したりしをば、故院殊に御歎あ(2)て、八幡行幸延引し、御遊なかりき。惣て臣下の卒するをば、代々御門みな御歎ある事こそ候へ。さればこそ、親よりもなつかしう、子よりもむつまじきは、君と臣との中とは申事にて候らめ。され共、内府が中陰に八幡の御幸あ(2)て御遊ありき。御歎の色、一事も是をみず。たとひ入道がかなしみを御さはれみなく共、なか内府が忠をおぼしめし忘れさせ給ふべき。…次に、中納言闕の候し時、二位中将の所望を候しを、入道随分執り申しか共、遂にご承引なくして、関白の息をなさるゝ事はいかに。…」

(巻三 二五二 11・二五三 6 「法印問答」)

並列…おなじく(同)

13 「其もの心にくからず。おもへば信濃一國の兵共こそしたがひつくといふ共、越後國には餘五將軍の末葉、城

太郎助長、おなじく同 四郎助茂、これらは兄弟ともに多勢のもの共なり。仰くだしたらんずるに、やすう打てまいらせんず」  
(巻六 四〇四 5 「飛脚到来」)

ここは兄弟の名を列挙している台詞である。このような場合は、「おなじく同」おなじくと定型句化した語句使用と言えるのではないだろうか。

対 (自己に対する評価) …かたじけなく(忝)

14 「われ保元・平治より此のかた、度々の朝敵をたいらげ、勸賞身にあまり、かたじけなくも帝祖太政大臣にいたり、榮花子孫に及ぶ。…」  
(巻六 四〇九 7 「入道死去」)

清盛の非ウ音便使用は嫡男であり、平家一門の頭領である重盛と後白河法皇に対してである。『平家物語』の中で清盛よりも上の存在は後白河法皇である。12の「御さはれみなく共」、「ご承引なくして」の主語は法皇であり、非音便形は後白河法皇に対する畏まりの現れと見える。

改まった表現以外にも、11の「よくくいましめよ」のように命令を強める形での非ウ音便形の使用も見られる。

(2) 平重盛(一一三八〜一一七九)父は清盛。宗盛・知盛・重衡らの異母兄。維盛・資盛・清経らの父。

ウ音便 延べ 15例…くるしう(苦)・あらまほしう(有)・おそろしう(恐)・おもう(重)・ふかう(深)・こころ

ぼそう(心細) (2)・さうなう(左右無)・つたなう(拙)・なさけなう(情無)・いたはしう(痛)・いやしう(賤)・おなじう(同)・おんこころやすう(御心安)・むなしう(空)

対 (一族) 平清盛…くるしう(苦)・おなじう(同)

15 「是はすこしもくるしう候まじ。頼政・光基など申源氏どもにあざむかれて候はんは、誠に一門の恥辱でも

候べし。重盛が子どもとて候はんずる者の、殿の御出にまいり逢て、のりものよりおり候はぬこそ尾籠に候へ」

(巻一 一一八―七「殿下乗合」)

16 「それもおなじうめしこそかへされ候はめ。若一人も留められんは、中々罪業たるべう候」

(巻三 二二二―七「赦文」)

対 (一族) 平教盛：おんこころやすう (御心安)

17 「少將はすでに赦免候はんずるぞ。御心やすう思食され候へ」 (巻三 二二二―12「赦文」)

対 (自己の心情)：おそろしう (恐)・あらまほしう (有)・おもう (重)・ふかう (深)・こころぼそう (心細)

(2)・つたなう (拙)・いやしう (賤)

18 「あの成親卿うしなはれん事、よくく御ばかりかひ候べし。保元に申行ひし事、いくほどもなく身の上にも

かはりにきと思へば、おそろしうこそ候しか。御栄花残る所なければ、覚しめす事有まじければ、子々孫々

までも繁昌こそあらまほしう候へ。 (巻一 一六一―8・10「小教訓」)

19 「是は君の御ことほりにて候へば、官大相國に至り、劔を帶し沓をはきながら殿上にのぼる事をゆるされし

か共、叡慮にそむく事あれば、高祖おもう警めてふかう罪せられにき。富貴の家には禄位重畳せり、ふた、

び實なる木は其根必いたむとみえて候。心ぼそうこそおぼえ候へ。いつまでか命いきて、みだれむ世をも見候

べき。只末代に生をうけて、かゝるうき目にあひ候重盛が果報の程こそつたなう候へ。 (巻一 一七四―14・一七五 3・5「烽火之沙汰」)

(巻一 一七四―14・一七五 3・5「烽火之沙汰」)

20 「人の親の身としてか様の事を申せば、きはめておこがましけれ共、但此世の中の有様、いかゞあらむずら

むと、心ぼそうこそ覚れ。貞能はないか。少將に酒すゝめよ」 (巻三 二四六―16「無文」)

- 21 「親父入道相國の躰をみるに、悪逆無道にして、やゝもすれば君をなやまし奉る。…そのふるまひをみるに、一期の榮花猶あやうし。枝葉連續して、親を顯し名を揚げむ事かたし。此時に當て、重盛いやしうも思へり。…」  
 (卷三 二四一—6 「醫師問答」)
- 対 (家臣) 平家の侍ども…さうなう (左右無)
- 22 「仰なればとて、大納言左右なう失ふ事有べからず。…」  
 (卷二 一六一—14 「小教訓」)
- 対 (家臣) 難波経遠・瀬尾兼康…なさけなう (情無)
- 23 「さても経遠・兼康がけさ大納言に情なうあたりける事、返々も奇怪也。…」  
 (卷二 一六二—1 「小教訓」)
- 対 (家臣) 平盛俊 (越中前司) …いたはしう (痛)
- 24 「まづ「醫療の事畏て承候ぬ」と申べし。…先言耳にあり、いまも<sup>㊦</sup>て甘心す。重盛いやしくも九卿に列して三台にのぼる。其運命をはかるに、も<sup>㊧</sup>て天心にあり。なんぞ天心を察せずして、をろかに醫療をいたはしうせむや。…」  
 (卷三 二四三—11 「醫師問答」)
- 対 (家臣) 与三兵衛重景…むなしう (空)
- 25 「あなむざんや。…おのれが父景康をよびし様にめさばやとこそおもひつるに、むなしうなるこそかなしけれ。…」  
 (卷十 二七四—16 「維盛出家」)
- 重盛のウ音便使用は、父清盛や叔父教盛といった一族や家臣に対して行われている。『平家物語』において重盛は、忠君孝子のな人物として描かれる傾向にある。そのため父清盛の暴走ぶりに苦悩する姿というものが多く見られる。重盛の心情と判断したウ音便の用例17〜20は、重盛のそのような姿がうかがえるであろう。
- 非ウ音便 延べ 5例…よく(能) (2)・なく(無)・みだりがはしく(乱・濫・猥)・いやしく(賤)

対 (一族) 平清盛…よく(能)・なく(無)

26 「あの成親卿うしなはれん事、よくく御ばからひ候べし。…保元に申行ひし事、いくほどもなく身の上にもかはりにきと思へば、おそろしうこそ候しか。…いかさまにも今夜首を刎られん事、然べうも候はず」

(巻二 一六一―6「小教訓」)

対 (一族) 平教盛…よく(能)

27 「まことにさこそおぼしめされ候らめ。子は誰とてもかなしければ、能々申候はん」

(巻三 二二二―15「赦文」)

対 (自己に対する評価) …いやしく(賤)

28 「まづ「醫療の事畏て承候ぬ」と申べし。…先言耳にあり、いまもて甘心す。重盛いやしくも九卿に列して三台にのぼる。其運命をはかるに、もて天心にあり。なんぞ天心を察せずして、をろかに醫療をいたはしうせむや。…」

(巻三 二四三―10「醫師問答」)

対 (後白河法皇) …みだりがはしく(乱・濫・猥)

29 「此仰承候に、御運ははや末に成ぬと覺候。人の運命の傾かんとては、必惡事を思ひ立候也。…いはゆる重盛が無才愚闇の身をもて蓮府槐門の暗いに至る。しかのみならず、國郡半過て一門の所領となり、田園悉一家の進止たり。是希代の朝恩にあらずや。今これらの莫大の御恩を忘れて、みだりがはしく法皇を傾け奉らせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背候なんぞ。…」

(巻二 一七二―15「教訓状」)

重盛の非ウ音使用は、29に見られる「惡事」、「無才愚闇」、「蓮府槐門」といった漢語や、「就中」、「く」にあらず、「何況哉」、「争か」といった漢文訓読調の言い回しの中に使用されている。巻三「醫師問答」での会話文で

も同じく中国の故事の引用や、「なんぞ」といった漢文訓読調の言い回しと一緒に用いられているのである。そういった言い回しの中ではウ音便よりも、非ウ音便の方が使われる傾向が高いと言える。

また、26 「よく／＼御ぼからひ候べし」や27 「能々申候はん」というように「よく」を重ねて相手に強く言い含める意味合いの場合には、非ウ音便が用いられている。

(3) 平宗盛(一一四七―一一八五) 清盛の三男。清盛の没後、平家の家督を継ぐ。

ウ音便 延べ 10例：いとほしう・やさしう(優)・こころづよう(心強)・いふかひなう(言甲斐無)・はづかしう

(恥)・さうなう(左右無)・うれしう(嬉)・なう(無)・わるう(悪)・よう(良)

対 (自己の心情)：いとほしう

30 「なにと候やらん、此宮を見たてまつるがあまりにいとをしうおもひまいらせ候。りをまげて此宮の御命をば

宗盛にたび候へ」

(巻四 三三二―9 「若宮出家」)

対 (一族) 平維盛：こころづよう(心強)

31 「などや心づよう六代どのをば具し奉り給はぬぞ」

(巻七 一一〇―15 「二門都落」)

対 (一族) 平時子(二位殿)：いふかひなう(言甲斐無)・はづかしう(恥)・さうなう(左右無)

32 「誠に宗盛もさこそは存候へども、さすが世のきこへもいふかいなう候。且は頼朝がおもはん事もはづかしう

候へば、左右なう内侍所をかへし入たてまつる事はかなひ候まじ。…」

(巻十 二四九―13・14 「請文」)

対 (一族) 平知盛：なう(無)

33 「見えたる事もなうて、いかゞ頸をばきるべき。さしも奉公の物であるものを。重能まいれ」



(卷十一 三三〇-10 「鶏合壇浦合戦」)

対 (一族) 副将 (宗盛若君) …うれしう (嬉)

34 「さらば副将、とくかへれ、うれしうも見つ」

(卷十一 三五九-9 「副将被斬」)

対 (家臣) 齋藤実盛…やさしう (優)

35 「やさしう申たる物かな」

(卷七 八一-11 「実盛」)

対 (家臣) 阿波民部重能…わるう (悪)・よう (良)

36 「いかに、重能は心がりしたるか、けふこそはわるう見ゆれ。四國の物どもに、いくさようせよと下知せよかし。おくしたるな」

(卷十一 三三〇-13 「鶏合壇浦合戦」)

宗盛のウ音便使用は、一族の者たちや家臣に向けて行われていると言える。

**非ウ音便 延べ** 6例…おほく(多)・よく(能)・くちをしく(口惜)・はかなく・わすれがたく(忘難)・とく(疾)

対 (一族) 副将 (宗盛若君) …とく(疾)

37 「さらば副将、とくかへれ、うれしうも見つ」

(卷十一 三五九-8 「副将被斬」)

ここの「とく」は「かへれ」を強める意味で非ウ音便形か。一方、「うれしうも見つ」はウ音便形にすることで息子に会えたことへの喜びを表現していると思われる。

対 (女院) 建礼門院…くちをしく(口惜)

38 「此世の中のあり様。さりととも存候つるに、いまはかうにこそ候めれ。たゞ都のうちでいかにもならんと、人々は申あはれ候へども、まのあたりうき目を見まいらせんも口惜候へば、院をも内をもとり奉て、西國の方へ御幸行幸をまなしまいらせてみあやとこそ思ひな<sup>て</sup>候へ」

(卷七 九四-9 「主上都落」)

対 (源氏方) 長谷部信連…おほく(多)・よく(能)

39 「まことにわ男は、「宣旨とはなむぞ」とてき<sup>②</sup>たりけるか。おほくの廳の下部を刃傷殺害したん也。せむずるところ、糺問してよく、事の子細をたづねとひ、其後河原にひきいだいて、かうべをはね候へ」

(巻四 二八八―9 「信連」)

対 (源氏方) 守護の武士…はかなく・わすれがたく(忘難)

40 「是をのく<sup>①</sup>き、給へ。…なのめならずうれしげにおもひて、すでにかぎりの時まで名をよびな<sup>②</sup>どしてあひせしが、なぬかといふにはかなくなりてあるぞとよ。此子を見るたびごとには、その事がわすれがたくおぼゆるなり」

(巻十一 三五九―5・6 「副将被斬」)

宗盛の非ウ音便使用は、一族であったが皇室に入り建礼門院という女院になった徳子や、長谷部信連や守護の武士といった敵である源氏方の者に向けての使用が見られる。

37のように命令を強める意味で非ウ音便を用いたと思われる表現もある。

(4) 平重衡(一一五七―一一八五) 清盛の第五男。母は平時子。

ウ音便 延べ 8例…くちをしう(口惜)・くらう(暗・闇)・ことあたらしう(事新)・やさしう(優)・なざけふか  
う(情深)・ありがたう(有難)・とほう(遠)・ふかう(深)

対 (一族) 重衡北の方…とほう(遠)

41 「契あらば後世にてはかならず生まれあひたてまつらん。ひとつはちすにといのり給へ。日もたけぬ。奈良へも遠う候。武士どものまつも心なし」

(巻十一 三七五―5 「重衡被斬」)

対 (自己の心情) …くちをしう (口惜)

42 「今度いきながらどらはれて候けるは、ふたたび上人の見參にまかり入るべきで候けり。…いかなる行を修して、一業たすかるべしともおぼえぬこそくちをしう候へ。倩ら一生の化行をおもふに、罪業は須弥よりもたかく、善業は微塵ばかりも蓄へなし。…」 (卷十 二五五<sup>1</sup> 8 「戒文」)

対 (自己の心情) …やさしう (優)

43 「やさしうもつかま<sup>(2)</sup>たる物かな。この歌のぬしはいかなる物やらん」 (卷十 二五九<sup>1</sup> 4 「海道下」)

対 (自己の心情) …ふかう (深)

44 「まことに心ざしの程神妙也。佛ををがみたてま<sup>(2)</sup>てきらればやとおもふはいかゞせんずる。あまりに罪ふかうおぼゆるに」 (卷十一 三七六<sup>1</sup> 13 「重衡被斬」)

対 (源氏方) 源頼朝…ことあたらしう (事新)

45 「まづ南都炎上の事、故入道の成敗にもあらず、重衡愚意の發起にもあらず。…近比源氏の運かたぶきたりし事は、事あたらしう初めて申べきにもあらず。…」 (卷十 二六一<sup>1</sup> 9 「千手前」)

対 (源氏方) 守護の武士…なさけふかう (情深)・ありがたう (有難)

46 「此程事にふれてなさけふかう芳心おはしつるこそありがたううれしけれ。同くは最後に芳恩をか<sup>(2)</sup>ぶりたき事あり。…」 (卷十一 三七二<sup>1</sup> 13・三七三<sup>1</sup> 1 「重衡被斬」)

重衡のウ音使用は、北の方といった身内に対してや、自己の心情を吐露する場合が多いと言える。

非ウ音便 延べ 9例…かたじけなく (忝)・くちをしく (口惜)・なく (無) (2)・ふかく (深)・わるく (悪)・お

なじく (同)・とく (疾)・たかく (高)

対 (自己の心情) …わるく(悪)

47 「さこそはあらんずれ。いかに一門の人々わるくおもひけん」

(巻十 二五三下10 「戒文」)

対 内裏の女房…なく(無) (2)

48 「西國へくだりし時、今一度みまいらせたう候しかども、おほかたの世のさはがしさに、申すべきたよりもな  
く、まかりくだり候ぬ。其後はいかにもして御ふみをもまいらせ、御かへり事をもうけ給はりたう候しかど  
も、心にまかせぬたびのならひ、あけくれのいくさにひまなくて、むなしくとし月をおくり候き。いま又人し  
れぬありさまをみ候は、ふたたびあひみたてまつるべきで候けり」

(巻十 二四六下16・二四七下2 「内裏女房」)

かつて、重衡は内裏に伺候する女房と交際していた。彼女との最期の別れを惜しむ気持ちと、相手が内裏に仕える女房であることを意識しての非ウ音便使用かと思われる。

対 (宗教者) 法然上人…ふかく(深)・たかく(高)

49 「今度いきながらとらはれて候けるは、ふたたび上人の見參にまかり入るべきで候けり。…身の身にて候し程  
は、出仕にまぎれ、政務にほだされ、憍慢の心のみふかくして、かつて當來の昇沈をかへりみず。…倩ら一生  
の化行をおもふに、罪業は須弥よりもたかく、善業は微塵ばかりも蓄へなし。…ねがはくは、上人慈悲をこそ  
しあはれみを垂て、かゝる悪人のたすかりぬべき方法候者、しめし給へ」

(巻十 二五四下13・二五五下9 「戒文」)

対 (天皇) …かたじけなく(忝)

(自己の心情) …くちをし(口惜)

(源氏方) 源頼朝…とく(疾)

50 「まづ南都炎上の事、故入道の成敗にもあらず、重衡愚意の發起にもあらず。…當家は保元・平治よりこのかた、度々の朝敵をたいらげ、勸賞身にあまり、かたじけなく一天の君の御外戚として、一族の昇進六十餘人、廿余年このかたは、たのしみさかへ申はかりなし。…されば、運つきて宮こを出し後は、かばねを山野にさらし、名を西海の浪にながすべしとこそ存ぜしか。これまでくだるべしとは、かけてもおもはざりき。たゞ先世の宿業こそ口惜候へ。…たゞ芳恩には、とくくかうべをはねられるべし」

(卷十一 二六一—10・二六二丁2・5 「千手前」)

この台詞全体は頼朝に対面した際のものであるが、「かたじけなく」は「一天の君」にかかり、「口惜」は自己の心情を述べているものと捉えた。「とくく」は、早く首を刎ねると頼朝に対し強く迫る意味でここでは用いているのではないかと思われる。

対 (源氏方) 守護の武士…おなじく(同)

51 「此程事にふれてなさけふかう芳心おはしつるこそありがたううれしけれ。同じくは最後に芳恩か(ウ)ぶりたき事あり。…」

(卷十一 三三三—1 「重衡被斬」)

重衡の非ウ音使用は、自己の心情を述べる際の強調として用いている場合と、重衡が救いの道を求めた宗教者である法然や天皇などに対する畏まりの表現として用いている例が見られる。

頼朝に対しては、早く首を刎ねると迫っている様を強調する表現として非音便形が用いられていた。

(5) 平維盛(一一五九—一一八四)父は重盛。母は官女。異母弟に資盛・清経・師盛・忠房がいる。

ウ音便 延べ 13例 たのもしう(頼)・こころやすう(心安)(3)・かなしう(悲)・たよりなう(頼無)(2)・こ

ころぐるしう(心苦)(2)・せばう(狭)・むなしう(空)・まさしう(正)・とう(疾)

対 (自己の心情) …こころやすう(心安)(2)

52 「まことに人は十三、われは十五より見そめ奉り、…いづくの浦にも心やすう落ちついたらば、それよりして

こそむかへに人をもたてまつらぬ」

(巻七 九九・3 「維盛都落」)

53 「をのれらが父齋藤別當北國へくだし時、…あの六代をとめて行に、心やすうふちずべき者のなきぞ。

たゞ理をまげてとゞまれ」

(巻七 一〇〇・5 「維盛都落」)

対 (自己に対する表現) …せばう(狭)・むなしう(空)

54 「維盛こそ人しれぬおもひを身にそへながら、みちせばうのがれがたき身なれば、むなしうなるとも、このご

ろは世にある人こそおほけれ、なんぢらはいかなるありさまをしても、などかかすぎざるべき。…」

(巻十 二七三・10・11 「維盛出家」)

対 (一族) 北の方・六代・姫君 …こころやすう(心安)

55 「日ごろ申様に、われは一門に具して西國の方へ落行也。いづくまでも具し奉るべけれ共、道にも敵待なれば、

心やすうとおらん事も有がたし。…」

(巻七 九八・2 「維盛都落」)

対 (一族) 六代 …たのもしう(頼)

56 「行すゑとてまたのもしうも候はず」

(巻七 一一〇・16 「一門都落」)

対 (一族) 北の方(手紙) …かなしう(悲)

57 「宮こにはかたきみちくへ、御身のひとつのおきどころだにあらじに、おさなき物どもひきぐして、いかにかなしうおぼすらん。…」  
(卷十 二四〇-11 「首渡」)

対 (家臣) 舍人武里…とう (疾)

(一族) 北の方…まさしう (正)

(一族) 平家一門…たよりなう (頼無)

(自己の心情) …こころぐるしう (心苦)

58 「おのれはどうくこれより八嶋へかへれ。宮こへはのぼるべからず。そのゆへは、つるにはかくれあるまじけれども、まさしうこのありさまをきいては、やがてさまをもかへんずらんとおぼゆるぞ。八嶋へまい<sup>(2)</sup>て人々に申さんずるやうはよな、「かつ御らん候しやうに、大方の世間も物うきやうにまかりなり候き。…われさへかくなり候ぬれば、いかにをのく<sup>(3)</sup>たよりなうおぼしめされ候はんずらんと、そのみこそ心ぐるしう思ひまいらせ候へ。…」と申せ」  
(卷十 二七五-16・二七六-1・6・7 「維盛出家」)

対 (一族) 平家一門…たよりなう (頼無)

(自己の心情) …こころぐるしう (心苦)

59 「西國にて左の中將うせさせ給候ぬ。…我さへかくなり候ぬれば、いかにたよりなうおぼしめされ候はんずらんと、そのみこそ心ぐるしう思ひまいらせ候へ。」  
(卷十 二八五-14・15 「三日平氏」)

維盛のウ音便使用は、自己の心情を語る際や、北の方や六代といった一族や家臣たちに語りかける際に見られる。これまでの清盛・重盛・重衡・宗盛らと同様、ウ音便は一族郎党、つまり身内である平家の人々に向けて主に使われていると言える。

非ウ音便 延べ 5例…おなじく(同)・おぼつかなく(覚束無)・なく(無)(2)・こころぐるしく(心苦)

対 (二族) 北の方・六代・姫君…おぼつかなく(覚束無)なく(無)

60 「宮こにいかにおぼつかなくおもふらん。頸どものなかにはなくとも、水におぼれてもしに、矢にあた(っ)てもうせぬらん。この世にある物とはよもおもはじ。露の命いまだながらへたるとしらせたまつらばや」

(巻十 二四〇・6・7 「首渡」)

対 (二族) 北の方(手紙)…こころぐるしく(心苦)

61 「宮こにはかたきみちく(っ)て、御身のひとつのおきどころだにあらじに、…これへむかへたてま(っ)て、ひと(っ)ころでいかにもならばやとおもへども、我身こそあらめ、御ため心ぐるしくて」

(巻十 二四〇・13 「首渡」)

対 (自己の心情)…なく(無)

62 「維盛が身のいつとなく、雪山の鳥のなくらんやうに、けふよあすよとおもふ物を」

(巻十 二七三・2 「維盛出家」)

対 (宗教者) 滝口入道…おなじく(同)

63 「さればこそ。…いかにもして山づたひに都へのぼ(っ)て戀しき物どもを今一度見もしみえばやとおもへども、本三位中将の事口惜ければ、それもかなはず。おなじくはこれにて出家して、火のなか水の底へもいらばやとおもふ也。…」

(巻十 二七一・6 「高野巻」)

維盛の非ウ音便使用は、ウ音便と同様家族に対して多く用いられていた。61は手紙での使用のため非音便形が用い



られていてもおかしくない。60のような「宮こにいかにおぼつかなくおもふらん」は都にいる家族がどれほど心配しているだろうと維盛の家族を思う気持ちが強く表されていると取れるであろうか。

### ウ音便と非ウ音便の使用傾向

ここまで平清盛・平重盛・平宗盛・平重衡・平維盛の五人の音便使用の対象者と使用場面について見てきたが、その結果次の使用傾向がうかがえる。

ウ音便の使用について

1、清盛・重盛・宗盛・重衡・維盛の五人とも平家の一族や家臣など身内に対してはウ音便を使う傾向が強い。

2、また、自己の心情を述べる際にもウ音便の使用が見られる。

3、身分的に上位の者に対してや、敵方の者に対しては非ウ音便が使われる傾向がある。

4、畏まった状況や場面では非ウ音便が使われる。

5、漢語や漢文訓読調の表現とともに非ウ音便が使われる傾向がある。

6、命令表現などを強調する表現として非ウ音便が使われる傾向がある。

### 三二三 平家方東国出身者

平家方の東国出身者は2名である。西国出身者に比べて少ないが、それぞれ下野国と武蔵国の出身である。

足利忠綱 斎藤実盛

採録結果

ウ音便 延べ 7例

2例 いたう(痛)・つよう(強)

1例 ころう(黒)・たやすう(一易)・よわう(弱)

非ウ音便 延べ 4例

1例 ちかく(近)・つよく(強)・とほく(遠)・よく(良)

以下、ウ音便と非ウ音便の出現数を各人ごとに示す。

(1) 足利忠綱                      ウ音便 5例    非ウ音便 3例

(2) 斎藤実盛                      ウ音便 2例    非ウ音便 1例

合計                                      7例            4例

平家方東国出身者の会話文における形容詞はウ音便が7例、非ウ音便が4例と平家方西国出身者の結果同様、ウ音便が多く見られる結果となった。東国出身者であるから非ウ音便が多く見られるというわけではないようである。

三十四 ウ音便と非ウ音便の使用場面

次に平家方東国出身者のウ音便や非ウ音便が誰に対して、またはどのような場面において使われているのかということを見ていく。

(1) 足利忠綱(一一六四?~?) 下野国の武士。名字の地は下野国足利庄(現栃木県足利市)。治承四年(一一八〇)

源頼政が以仁王を奉じて挙兵した時、平家に属して上洛、頼政を攻めた。

ウ音便 延べ 5例…つよう(強)(2)・いたう(痛)(2)・よわう(弱)

対(家臣) 配下の者たち…つよう(強)(2)・いたう(痛)(2)・よわう(弱)

64 「つよき馬をばうは手にたてよ、よはき馬をばした手になせ。…鞍つぼによくのりさだま<sup>(ツ)</sup>て、あぶみをつ

ようふめ。馬之かしらしづまばひきあげよ。いたうひいてひ<sup>(ツ)</sup>かづくな。水しとまば、さんづのうへののりか、れ。馬にはよほう、水にはつようあたるべし。河なかで弓ひくくな。かたきゑるともあひびきすな。つねにしころをかたぶけよ。いたうかたむけて手へんすな。かねにわたいておしをとさるな。水にしなうてわたせやわたせ」  
(卷四 三二三丁5・6・7・8「橋合戦」)

非ウ音便 延べ 3例…とほく(遠)・ちかく(近)・よく(良)

対(家臣) 配下の者たち…よく(良)

65 「つよき馬をばうは手にたてよ、よはき馬をばした手になせ。…鞍つぼによくのりさだま<sup>(ツ)</sup>て、あぶみをつようふめ。馬之かしらしづまばひきあげよ。いたうひいてひ<sup>(ツ)</sup>かづくな。水しとまば、さんづのうへののりか、れ。馬にはよほう、水にはつようあたるべし。河なかで弓ひくくな。かたきゑるともあひびきすな。つねにしころをかたぶけよ。いたうかたむけて手へんすな。かねにわたいておしをとさるな。水にしなうてわたせやわたせ」  
(卷四 三二三丁4「橋合戦」)

「よく(良)」は、ウ音便化した形「よう(良)」も見られるが、音便化しない形も多く見られる。平家方、源氏方で見られた「よく(良)」の数は、合わせて7例で、「よう(良)」は6例であった。

対 (源氏方) 源頼政の軍勢…とほく(遠)・ちかく(近)

66 「とをくは音にもき、ちかくは目にもみ給へ。昔朝敵将門をほろぼし、勸賞かうぶ<sup>(2)</sup>し、依藤太秀郷に十代、足利太郎俊綱が子、又太郎忠綱、生年十七歳、…三位入道殿の御かたに、われとおもはん人々はよりあへや、げ(3)ごんせん」 (巻四 三二四-1「宮御最期」)

敵方の源頼政の軍勢に向かって東国武士である忠綱が名告りを上げている場面である。この場合の「とをくは音にもき、ちかくは目にもみ給へ。」という台詞は、その名告りにおいてある種の定型句化されたものと言えるのではないか。

忠綱は、64のように自分の配下の者たちに向かって「つよう(強)(2)・いたう(痛)(2)・よわう(弱)」といったウ音便を用いて命じている。

一方で忠綱の非ウ音便は、65の「よく(良)」などの音便化しない形としての使用も多く見られる語や、66のような名乗りの場面における定型句化された語句使用においての非ウ音便形の使用が見られた。

(2) 斎藤実盛(?-一一八三) 武藏国長井(埼玉県熊谷市妻沼町長井周辺)に住して長井斎藤別当と称した。平治の乱敗北後、関東に逃れたが、その後平家に仕えた。

ウ音便 延べ 2例…たやすう(一易)・くろう(黒)

対 (平家方) 平維盛…たやすう(一易)

67 「さ候へば、君は實盛を大矢とおぼしめし候歟。…鎧の二三兩をかさねて、たやすうるとをし候也。…」

対 (源氏方) 樋口兼光…くろう (黒)

68 「六十にあまていくさの陣にむかはん時は、びんびげをくろう染てわかやがうどおもふなり。…」

(巻七 八〇下16 「實盛」)

67は東国の事情に通じている者として維盛に「お前ほどの弓の射手は東国にどのくらいいるのか」と聞かれて答えらる。自分のような東国武者が鎧の二三両を射ることはたやすいことだと強調するためのウ音便使用と考えられる。

68は実盛がかつて樋口兼光に述べた言葉である。兼光は、同じ東国武士として発話当時は同僚であったため、身内と捉えることができるであろう。

非ウ音便 延べ 1例…つよく(強)

対 (平家方) 東国武士たち…つよく(強)

69 「情此世中の有様を見るに、源氏の御方はつよく、平家の御方はまげ色にみえさせ給ひたり。いざをのく木曾殿へまいらふ」

(巻七 七六一5 「篠原合戦」)

頼朝に対して弓を引き、平家方についていた東国の武士たちとの会話文である。彼らに戦況としては源氏の方が強く、平家は旗色が悪いと見受けられるため木曾殿へ味方しようかと持ちかけているが、結局は戯言なのであって最後まで平家方につくことを決意している。ここでは「みえさせ給ひたり」という敬語があることから、ウ音便形ではなく非ウ音便形を用いたのではないだろうか。

## ウ音便と非ウ音便の使用傾向

足利忠綱・斎藤実盛の二人の音便使用の対象者と使用場面の結果から、次の使用傾向がうかがえる。

- 1、両者とも配下の者や親しい者に対してはウ音便を使う傾向がある。
- 2、一方、非ウ音便は、定型句された語句使用の中で見られたり、敬語と共に見られる例がある。

## 四、源氏方出身地域別音便出現状況

### 四一 源氏方西国出身者

源氏方の西国出身者は5名である。やはり源氏方は東国出身者が多いものの、頼朝や義経といった源氏方の中心人物たちは京都で少年期を過ごしている。

源頼政 源頼朝 長谷部信連 源義経 渡辺競

### 採録結果

ウ音便 延べ 18例

2例 こひしう(恋)・たやすう(一易)

1例 あたらしう(新)・ありがたう(有難)・うたてしう・うらめしう(恨)・おほう(多)・おもう(重)・おもしろう(面白)・きびしう(厳)・こころにくう(心憎)・ことあたらしう(事新)・ちかう(近)・ものがなしう(一悲)・やさしう(優)・をしう(惜)

以下、源氏方の会話文でのウ音便使用の一例として用例を示してみる。用例の該当箇所に傍線を付した。

長谷部信連

「只今御所へ官人共が御むかへにまいり候なるに、御前に人一人も候はざらんが、無下にうたてしう覚候。…弓矢とる身は、かりにも名こそおしう候へ。官人共しばらくあいしらいて、打破て、やがてまいり候はん」

(巻四 二八六―4・6 「信連」)

非ウ音便 延べ 18例

3例 おほく(多)・なく(無)

2例 おなじく(同)・よく(良)

1例 ひとつとなく・おんこころやすく(御心安)・くちをしく(口惜)・こころうく(心憂)・ことゆゑなく(事故無)・とく(疾)・まさしく(正)・をしく(惜)

以下、源氏方の会話文での非ウ音便使用の一例として用例を示してみる。用例の該当箇所には傍線を付した。

源頼政

「君は天照大神四十八世の御末、神武天皇より七十八代にあたらせ給ふ。…法皇のいつとなく鳥羽殿におしこめられてわたらせ給ふ御心をも、やすめまいらせ、君も位につかせ給ふべし。…悦をなしてまいらむずる源氏どもこそおほう候へ」

以下、ウ音便と非ウ音便の出現数を各人ごとに示す。

(巻四 二七九―11 「源氏揃」)

源頼政 ウ音便 1例 非ウ音便 4例

源頼朝 ウ音便 7例 非ウ音便 7例

長谷部信連 ウ音便 3例 非ウ音便 0例

源義経	ウ音便	6例	非ウ音便	7例
渡辺競	ウ音便	1例	非ウ音便	0例
合計		18例		18例

源氏方西国出身者の形容詞はウ音便、非ウ音便ともに同数で18例ずつ見られた。

#### 四二一 ウ音便と非ウ音便の使用場面

源氏方西国出身者のウ音便や非ウ音便が誰に対して、またはどのような場面において使われているのかということを見る。ここでは発言数の多い人物である源頼朝と源義経の二人の会話文に着目する。二人のウ音便と非ウ音便の数はそれぞれ次のように見られた。

(1) 源頼朝	ウ音便	7例	非ウ音便	7例
(2) 源義経	ウ音便	6例	非ウ音便	7例

(1) 源頼朝 (一一四七～一一九九) 左馬頭義朝の三男。平治の乱(一一五九)で右兵衛権佐となり、父義朝軍に属して敗れ翌年(一一六〇)捕らえられるが、死罪は免れ伊豆国蛭ヶ小島へ14歳で流される。以後、約二十年間流人生活を送った。

ウ音便 延べ 7例：ありがたう(有難)・こひしう(恋)・うらめしう(恨)・おも(重)・おもしろ(面白)・たやす(易)・きびし(敵)

対 (自己に対する評価)：おもしろ(面白)



70 「中人は面白うしたる物を」

(卷十 二六六―二「千手前」)

会話自体は女房の千手の前に対してのものである。ウ音便「おもしろう(面白)」は、自分(頼朝)が重衡と千手の前の仲介役をつとめたことに対する言葉である。自己に対する評価・表現と言える。

対 (源氏方) 熊野別当湛増…きびしう(厳)

71 「其条、國の費人の煩なるべし。たてごもる所の凶徒は定て海山の盗人にてぞあるらん。山賊海賊きびしう守護して城の口をかためてまぼるべし」  
(卷十二 四一五―九「六代被斬」)

一時期は平家の味方をしたが、現在は源氏方に下っている熊野別当湛増に対して山賊海賊を厳しく取り締まるように命じている。

対 (平家方) 平宗清…ありがたう(有難)・こひしう(恋)・うらめしう(恨)

72 「いかに、なにをいたはり候けるやらん。意趣を存候にこそ。むかし宗清がもとに候しに、事にふれてありがたうあたり候し事、今にわすれ候はねば、さだめて御ともに罷下候はんずらん、とく見參せばやな(〽)ど戀しう存て候に、うらめしうもくだり候はぬ物かな」  
(卷十 二八八―15・16 二八九―1「三日平氏」)

会話自体は平頼盛に対面した際のものである。ウ音便「ありがたう(有難)」「こひしう(恋)」「うらめしう(恨)」は、この時話題となっている平宗清に対して使われている。宗清は平家方の人間であるが、頼朝が以前世話になった人物であるので、頼朝にとっては親しみを感じる人物であると言える。そこでこの発話においては、ウ音便使用が多く見られるのではないだろうか。

対 (平家一門) …たやすう(一易)

73 「こはいかに、頼朝がよくはからひて兵をさしのぼすればこそ、平家はたやすうほろびたれ。久郎ばかりして

は争か世をしづむべき。…くだ<sup>(ウ)</sup>ても定て過分の振舞せんずらん」

(卷十一 三五七-10 「文之沙汰」)

発話自体は特に対象者がいない。ここで頼朝が話題にしているのは義経のことであるから、義経に対する発言ともとれる。ウ音便「たやすう(一易)」は平家滅亡に対する表現である。

対 (天皇(法皇)) : おもう(重)

74 「平家を別して私のかたきとおもひたてまつる事、ゆめく候はず。たゞ帝王仰こそおもう候へ」

(卷十 二六二-9 「千手前」)

会話自体は捕らえられた平重衡に対してのものである。ウ音便「おもう(重)」は、ここでは「帝王仰」にかかっている。これまで見てきた平家方の例では、天皇や法皇など上位の者に対しては畏まりの表現として非ウ音便が見られた。

比較対象として次に平重盛29の例を示す。

29 「此仰承候に、御運ははや末に成ぬと覚候。人の運命の傾かんとては、必悪事を思ひ立候也。…いはゆる重盛が無才愚闇の身をも<sup>(ウ)</sup>て蓮府槐門の暗いに至る。しかのみならず、國郡半過て一門の所領となり、田園悉一家の進止たり。是希代の朝恩にあらずや。今これらの莫大の御恩を忘て、みだりがはしく法皇を傾け奉らせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背候なんず。…」

これに対して頼朝は天皇(法皇)に対してもウ音便を使用している。

頼朝のウ音便使用は、自己に対する評価を表す文や、家臣への言葉の中で見られる。また、一例ではあるが、74のように天皇(法皇)に対してウ音便を用いている例が見られる。

非ウ音便 延べ 7例…まさしく(正)・とく(疾)・なく(無)(2)・よく(良)(2)・おほく(多)

対 (自己の心情) …とく(疾)

75 「いかに、なにをいたはり候けるやらん。意趣を存候にこそ。…とく見参せばやな(〇)ど戀しう存て候に、う  
らめしうもくだり候はぬ物かな」  
(巻十 二八八―16 「三日平氏」)

発話自体は平頼盛に対するものである。非ウ音便「とく(疾)」は、自分(頼朝)が宗清に早く対面したいという  
自身の希望を示す表現である。

対 (自己に対する評価) …よく(良)

76 「こはいかに、頼朝がよくはからひて兵をさしのぼすればこそ、平家はたやすうほろびたれ。…くだ(〇)ても  
定て過分の振舞せんずらん」  
(巻十一 三五七―10 「文之沙汰」)

非ウ音便「よく(良)」は、「平家滅亡は自分(頼朝)が事をよく計画したからこそ成し得たことだ」という発言の  
もので、自身の功績を一層強調するために使われたものと見られる。

対 (一族) 源義経…なく(無)・よく(良)

77 『當時まで都に別の子細なく候事、さて御渡ゆへとおぼえ候。相構てよく都の守護させ給へ』と申せ』  
(巻十二 三八六―6 「土佐房被斬」)

これは頼朝が土佐房昌俊の口を通して義経に言ったものである。非ウ音便「よく(良)」は「子細なく」という一  
語で副詞的に用いていると考えられる。「よく(良)」は、義経に対して「これからも都の守護をよくせよ」と命じる  
表現において使われている。

対 (源氏方) 北条時政…おほく(多)

78 「平家の子孫京中に多くしのでありときく。…いかにも尋ねいだして失ふべし」

(卷十一 三九九―16 「六代」)

時政に対して政略上の発言として命令している文で、非ウ音便が使われている。

対 (平家方) 平重衡…まさしく (正)

79 「抑君の御いきどおりをやすめたてまつり、父の恥をきよめんとおもひたちしうへは、平家をほろぼさんの案のうちに候へども、まさしくげんざんにいるべしとは存ぜず候き。…もての外の罪業にてこそ候なれ」

(卷十一 二六一―2 「千手前」)

非ウ音便「まさしく (正)」は「自分 (頼朝) があなた (重衡) に対面しようとは全く予想していなかった」という発言のもので、対面した重衡に対して敬意を払い、かしまった表現として用いていると見られる。

対 (平家方) 平維盛…なく (無)

80 「あはれ、へだてなくうちむかひておはしたらば、命ばかりはたすけてたてまてまし。…まして出家なとせられなんうへは、子細にや及べき」

(卷十一 二九一―6 「藤戸」)

ここで話題としているのは維盛のことで、「なく (無)」は「へだてなく」という複合語として捉えることができ。維盛に対して「あの時、遠慮なく鎌倉まで来ていたら命ばかりは助けてさしあげたのに」と発言している。頼朝の非ウ音便使用は、自身の功績や命令表現の強調として用いる傾向があると言える。

(2) 源義経 (一一五九―一一八九) 左馬頭義朝の九男。平治の乱によって父と死別し、鞍馬寺に預けられる。『義経

記』によれば、16歳で鞍馬を出て奥州平泉の藤原秀衡のもとへ下向したとされる。

ウ音便 延べ 6例…やさしう(優)・あたらしう(新)・ものがなしう(―悲)・こひしう(恋)・ことあたらしう

(事新)・たやすう(―易)

対 (自己の心情) …ものがなしう(―悲)・こひしう(恋)

81 「さこそ物がなしう、昔戀しうもおはしけめ」

(卷十一 三四四―8 「内侍所都人」)

発話自体の対象者はいない。生け捕りにされた平家方の女房たちが昔を思い出して泣く様子を見て、義経が口にした言葉である。「判官物のふなれどもなさけあるおのこなれば、身にしてみてあはれにぞおもはれける」とあるように、これら女房の姿を見て義経が武士とはいえ、情を理解する者であることを示す場面であるので「ものがなしう(―悲)」「こひしう(恋)」といった音便が使われたと見られる。

対 (家臣) 別府義重…やさしう(優)

82 「やさしうも申たる物かな。「雪は野原をうづめども、老たる馬ぞ道はしる」と云ためしあり」

(卷九 一九八―4 「老馬」)

ウ音便 「やさしう(優)」は、別府義重が息子に教えた内容に対する評価である。

対 (源氏方) 武士たち…あたらしう(新)

83 「舟の修理してあたらしうな」たるに、をのく一種一瓶していはひ給へ、殿原」

(卷十一 三〇五―8 「逆櫓」)

ここは、源氏方の武士たちという身内に対する発言と取れるので、ウ音便が使われているのではないか。

対 土佐房…たやすう(―易)

84 「夜討にも晝戦にも、義経たやすう討べきものは、日本國におぼえぬものを」

発話自体は義経を殺すよう頼朝から命じられ押し寄せた土佐房以下の兵たちに向けてのものである。

対 後白河法皇へ奏上する高階氏への発言：ことあたらしう(事新)

85 「義経君の御爲に奉公の忠を致事、ことあたらしう初て申上にをよび候はず。しかるを頼朝、郎等共が讒言によ(ウ)て、義経をうたんと仕候間、しばらく鎮西の方へ罷下らばやと存候。院廳の御下文を一通下預候ばや」

(卷十二 三九〇―10 「判官都落」)

この発話は高階泰経を仲介役として後白河法皇に向けたもので、仲介者である高階氏に対してウ音便を用いている。

義経のウ音便使用は、自己の心情を表わす際や、家臣に対しての言葉の中などに見られる。

非ウ音便 延べ 7例：おほく(多)(2)・くちをし(口惜)・おんころやす(御心安)・ことゆゑなく(事故

無)・なく(無)・をし(惜)

対 (内侍所しるしの御箱)：ことゆゑなく(事故無)

86 「この正月、木曾義仲と追討せしよりこのかた、一の谷・壇の浦にいたるまで、命をすてて平家をせめおとし、内侍所しるしの御箱事ゆへなく返しいれたてまつり、大將軍父子いけどりにして、ぐして是まで下りたらんには、たとひいかなるふしぎありとも、一度はなどか對面なかるべき。…」

(卷十一 三六四―3 「腰越」)

発話自体の対象者は特にいない。非ウ音便「ことゆゑなく(事故無)」は「内侍所しるしの御箱」にかかり、三種の神器である鏡と神璽に対してのかしこまった表現である。

対 (家臣) 梶原景時…なく(無)

87 「義経がなくばこそ」

(卷十一 三二八―5 「鶏合壇浦合戦」)

対 (源氏方) 武士たち…おほく(多)

88 「をのく船には篝などもひそ。…火かずおほく見えば、かたきおそれて用心してんず」

(卷十一 三〇六―10 「逆櫓」)

対 (平家方) 平宗盛…おんこころやすく(御心安)

89 「遠き國、はるかかの嶋へもうつしぞまいらせ候はんずらん。…御命ばかりはたすけまいらせ候べし。御心やす

(卷十一 三六三―1 「腰越」)

くおぼしめされ候へ」  
発話自体は平宗盛に対するものである。敵方とは言え、大臣である宗盛に対して畏まった表現として非ウ音便を用いている。

対 土佐房…をしく(惜)

90 「主君の命をおもんじて、私の命をかるんず。こゝろざしの程、尤神妙なり。和僧いのちおしくは鎌倉へ返し

(卷十二 三八八―16 「土佐房被斬」)

つかはさんはいかに」  
頼朝に命じられて義経の命を狙った土佐房だが、失敗し捕えられて義経の前に引き出される場面である。義経は自らの命を軽んじて主君である頼朝の命に従おうとする土佐房を神妙に思つての発言で非ウ音便が使われている。

対 後白河法皇へ奏上する高階氏への発言…おほく(多)・くちをしく(口惜)

91 「平家は神明にもはなたれ奉り、君にもすてられまいらせて、帝都をいで、浪のうへにたゞよふおちうととなれり。しかるを此三箇年があふだ、せめおとさずして、おほくの國々をふさげらるゝ事、口惜候へば、…平家

をせめおとさざらんかぎりは、王城へかへるべからず」

(巻十一 三〇二―4 「逆櫓」)

発話自体は高階泰経を介して後白河法皇に向けたものである。ここでは高階氏の背後の法皇を意識してか、「おほく(多)」、「くちをしく(口惜)」という非ウ音便を用いて畏まった言い回しになっている。

義経の非ウ音便使用は、後白河法皇や敵である平家方の者に対する畏まりの表現として見られる。

#### ウ音便と非ウ音便の使用傾向

源頼朝、源義経の二人の音便使用の対象者と使用場面については、次の使用傾向がうかがえる。

#### 源頼朝

1、頼朝は、自己や親しい者(平宗清)に対する会話文の中でウ音便を用いる。一方、天皇に対しても一例、音便使用が見られる。平家方の会話文では天皇又は法皇に対しては非ウ音便形が用いられていた。

2、頼朝は、自身の功績や命令表現の強調として非ウ音便を用いることが特徴的である。

#### 源義経

3、義経は、自己の心情を表わす際や、身内に対する会話文の中でウ音便を用いる。

4、法皇や敵方の者に対する畏まった表現としての非ウ音便の使用がある。

#### 四二二 源氏方東国出身者

源氏方の東国出身者は8名である。

熊谷直実 北条時政 源義仲 猪俣則綱 今井兼平 梶原景時 千野光広 浅利義成



採録結果

ウ音便 延べ 22例

2例 おなじう(同)・おもう(重)・よう(良)

1例 あしう(悪)・うつくしう(美)・かしこう(賢)・かたじけなう(忝)・くちをしう(口惜)・くるしう(苦)・こころぐるしう(心苦)・こころせばう(心狭)・さうなう(左右無)・したしう(親)・とう(疾)・なう(無)・なさけなう(情無)・みじかう(短)・むなしう(空)・よわう(弱)

以下、源氏方の会話文でのウ音便使用の一例として用例を示してみる。用例の該当箇所には傍線を付した。

梶原景時

「日本國は今はこのころなうしたがひたてまつり候。たゞし御弟久郎大夫判官殿こそ、つゐの御敵と見えさせ給候へ。…」 (卷十一 三六三下4 「腰越」)

浅利義成

「是はずこしよはう候。矢づかもち(2)とみじかう候。おなじうは義成が具足にてつかまつり候はん」

(卷十一 三三三下4・5 「遠矢」)

非ウ音便 延べ 6例

1例 いとほしく・おなじく(同)おほく(多)・つよく(強)・なく(無)よく(良)

以下、源氏方の会話文での非ウ音便使用の一例として用例を示してみる。用例の該当箇所には傍線を付した。

梶原景時

「私の黨の殿原の不覚でこそ、河原兄弟をばうたせたれ。今はときよく成ぬ。よせよや」

以下、ウ音便と非ウ音便の出現数を各人ごとに示す。

熊谷直実	ウ音便	3例	非ウ音便	1例
北条時政	ウ音便	4例	非ウ音便	1例
源義仲 <sup>⑧</sup>	ウ音便	4例	非ウ音便	2例
猪俣則綱	ウ音便	2例	非ウ音便	1例
今井兼平	ウ音便	3例	非ウ音便	0例
梶原景時	ウ音便	1例	非ウ音便	1例
千野光広	ウ音便	2例	非ウ音便	0例
浅利義成	ウ音便	3例	非ウ音便	0例
合計		22例		6例

源氏方東国出身者の形容詞ウ音便は22例、非ウ音便は6例でウ音便の方が多く見られる結果となった。平家方東国出身者でも見たように東国出身者に非ウ音便が多く見られるというわけではないようである。この点に関しては、覚一本『平家物語』を書写させた明石覚一検校(播磨国出身)の言語について考える必要があるか。

#### 四 四 ウ音便と非ウ音便の使用場面

源氏方東国出身者のウ音便や非ウ音便が誰に対して、またはどのような場面において使われているのかということを見る。ここでは発言数の多い人物である熊谷直実・北条時政・源義仲の三人の会話文に着目する。三人のウ音便と

非ウ音便の数はそれぞれ次のように見られた。

(1) 熊谷直実	ウ音便	3例	非ウ音便	1例
(2) 北条時政	ウ音便	4例	非ウ音便	1例
(3) 源義仲	ウ音便	4例	非ウ音便	2例

(1) 熊谷直実

ウ音便 延べ 3例……ころぐるしう(心苦)・ころせばう(心狭)・なさけなう(情無)

対 (自己の心情) ……ころぐるしう(心苦)

92 「あ<sup>(1)</sup> ぱれ大將軍や、此人一人うちたてま<sup>(2)</sup> たり共、まくべきいくさに勝べき様もなし。又うちたてまつら  
ず共、勝べきいくさにまくることよもあらじ。小次郎がうす手負たるをだに、直実は心ぐるしうこそおもふ  
に、此殿の父、うたれぬときいて、いかばかりかなげき給はんずらん、あはれ、たすけたてまつらばや」

(巻九 一二〇—14 「敦盛最期」)

これは会話文ではなく、直実が心の中で思ったことを述べた思惟文である。会話文に準ずるものとしてここは採録している。「ころぐるしう(心苦)」は、「小次郎がうす手負たるをだに、直実は心ぐるしうこそおもふ」となっている。身内に対する表現として用いられている。

対 (自己の心情) ……なさけなう(情無)

93 「あはれ、弓矢とる身ほど口惜かりけるものはなし。武藝の家に生れずは、何とてかゝるうき目ををばみるべき。なさけなうもうちたてまつる物かな」

(巻九 一二二—8 「敦盛最期」)

敦盛の首を泣く泣く斬った時の発話である。自分が武士の身に生まれたつらさ、情けなさを嘆く自己内表現としてウ音便を用いている。

対 (一族) 熊谷小次郎…ころせばう(心狭)

94 「我もくと、先に心かけたる人々はおほかるらん。心せばう直実ばかりとは思ふべからず。すでによせたれども、いまだ夜をあくるを相待て、此邊にもひかへたるらん、いざなのらう」

(巻九 二〇一—五 「一二之懸」)

この発話は、息子である熊谷小次郎に対してのものであり、身内に対する表現としてウ音便が用いられている。熊谷直実のウ音便使用は、息子といった身内に対してや、自己の心情を表す際に見られる。

非ウ音便 延べ 1例…おなじく(同)

対 (平家方) 平敦盛…おなじく(同)

95 「たすけまいらせんとは存候へ共、御方の軍兵雲霞の如く候。よものがれさせ給はじ。人手にかけまいらせんより、同くは直実が手にかけてまいらせて、後の御孝養をこそ仕候はめ」 (巻九 二二二—2 「敦盛最期」)

熊谷の非ウ音便使用はこの一例である。敵とは言え、自分の息子と同じ年ごろの敦盛に、親として心動かされた直実が言う台詞であり、敦盛に対しての畏まった表現として非ウ音便「おなじく(同)」が用いられている。

## (2) 北条時政

ウ音便 延べ 4例…むなしう(空)・うつくしう(美)・かしこう(賢)・とう(疾)

対 (自己の心情)…むなしう(空)

(平家方) 六代…うつくしう(美)

96 「鎌倉殿のおほせに、「平家の子孫京中に多くしのでありときく。…いかにも尋ねいだして失ふべし」と仰せを蒙りて候しが、…この若公は在所をしり奉らで、尋かねて既むなしう罷下らむとし候つるが、おもはざる外、一昨日聞出して、昨日むかへ奉て候へども、なのめならずうつくしうおはする間、あまりにいとおしくて、いまだかうもし奉てをきまいらせて候」  
(卷十二 四〇〇・4・5 「六代」)

文覚に対して六代を捕えた時のことを話す場面である。六代のあまりの美しさを「なのめならずうつくしうおはする」とウ音便を用いて表している。

対 (自己に対する評価) …かしこう(賢)

97 「廿日と仰られ候し御約束の日かざも過候ぬ。鎌倉殿の御ゆるされなきよと存じて具し奉て下る程に、かしこうぞ。爰にてあやまち仕るらむに」  
(卷十二 四〇六・7 「泊瀬六代」)

この「かしこう」は、日本古典文学大系頭注に「自分の心がけのよかつたことの自讃の意に使われている。」とあるように、六代を途中で斬るといふ過ちを犯さなかつた自分自身を誉める表現として使われている。

対 (一族) 北条時貞…とう(疾)

98 「とうわとの(和殿)のは歸(帰)て此人々のおはし所聞出して討てまいらせよ」  
(卷十二 四〇八・5 「泊瀬六代」)

甥の時貞に対して源行家や義憲を討つように命じる発話である。

北条時政のウ音便使用は、自己に対する評価や、身内に対して命令する際に見られる。

非ウ音便 延べ 1例…いとほしく  
対 (自己の心情) …いとほしく

99 「鎌倉殿のおほせに、「平家の子孫京中に多くしのでありときく。…いかにも尋ねいだして失ふべし」と仰せを蒙りて候しが、…この若公は在所をしり奉らで、尋かねて既むなしう罷下らむとし候つるが、おもはざる外、一昨日聞出して、昨日むかへ奉て候へども、なのめならずうつくしうおはする間、あまりにいとおしくて、いまだともかうどもし奉らでをきまいらせて候」  
(卷十二 四〇〇―6 「六代」)

北条時政の非ウ音便使用はこの一例のみである。同じ発話の中でも「むなしう」「うつくしう」はウ音便化しているが「いとおしく」は音便化していない。六代があまりにも美しくいとおしく思ったという時政の心情を強調するために非ウ音便形を用いたのではないだろうか。

### (3) 源義仲

ウ音便 延べ 4例…さうなう(左右無)・よう(良)・おなじう(同)・おもう(重)

(なりきり)…さうなう(左右無)

100 「…平家是を見て、「あはや源氏の戦陣はむかふたるは。定て大勢にてぞあるらむ。左右なう廣みへうち出て、

的は案内者、我等は無案内也、とりこめられては叶まじ。此山は四方巖石であんなれば、搦手よもまはらじ。

しばしおりゐて馬休ん」とて、山中にぞおりゐんずらん。」  
(卷七 六八―11 「願書」)

義仲が平家軍を倶利伽羅谷へ追い落そうと策略を練る場面である。この発話では「平家方がこう動くだろう」と平家方の出方を予想しており、自分が平家の人間になりきって発言しているのである。それ故、ここではウ音便を用いているのではないだろうか。なお、平家側はその後この台詞通りに動くこととなる。

対 (家臣) 今井兼平(または義仲の軍勢に対して)…よう(良)

101 「：大臣家や宮々の御所へもまいらばこそ僻事ならぬ。是は鼓判官が凶害とおぼゆるぞ。其鼓打破㊦て捨よ。今度は義仲が最後の軍にてあらむぞ。頼朝が歸きかむ處もあり、軍ようせよ。者ども」

(卷八 一五三丁5「鼓判官」)

全体の台詞としては今井兼平の発言に激怒した際のものになるが、最後の「軍ようせよ。者ども」は自分に従う者たちに向けて発せられたもので、士気を高めるためのものと捉えることができる。

対 (家臣) 今井兼平…おなじう (同)

102 「さてはよい敵ござんなれ。おなじう死なば、よからう敵にかけあふて、大勢の中でこそ打死をもせめ」

(卷九 一七七丁15「木曾最期」)

義仲が腹心の家来である今井兼平と再会し、最後の戦に赴く際の発話である。兼平は幼い時から共に過ごしてきた乳母子であるため彼との会話ではウ音便を用いていることが多い。

対 (家臣) 今井兼平…おもう (重)

103 「日來はなにともおぼえぬ鎧が、けふはおもうな」㊦たるぞや」 (卷九 一七九丁10「木曾最期」)

いよいよ兼平と主従二人だけになってしまった義仲の最期の場面である。ここでも義仲は腹心の兼平に対して「鎧が、けふはおもうな」㊦たるぞや」とウ音便を用いて語りかけている。

義仲のウ音便使用は100を除いて全て家来である今井兼平に対するものである。

非ウ音便 延べ 2例…なく(無)・おほく(多)

対 (家臣) 覚明(書記として連れていた義仲の配下の者)…なく(無)

104 「義仲こそ幸に新やはたの御寶殿に近付奉て、合戦をとげんとすれ。いかさまにも今度のいくさには相違なく

勝ぬとおぼゆるぞ。さらんにと<sup>(2)</sup>ては、且は後代のため、且は當時の祈禱にも、願書を一筆かいてまいらせ  
ばやと思ふはいかに」  
(巻七 六九―13 「願書」)

いよいよ平家軍と合戦という時、近くに八幡宮を発見した義仲は勝利を願って願書を書くよう命じている場面である。「間違ひなく勝つ」という決意を際立たせるため、ここでは非ウ音便を用いたか。

対 (家臣) 今井兼平…おほく(多)

105 「なんぢがゆくえの戀しさに、おほくの敵の中をかけわ<sup>(2)</sup>て、」  
(巻九 一七七―5 「木曾最期」)

「おほし(多)」という語は、ウ音便化しにくい語であると思われる。平家方、源氏方の「おほう(多)」は合わせ  
て2例であるのに対し、「おほく(多)」は6例見られる。このことから「おほく(多)」はウ音便化しにくい語であ  
ると言える。このように単語によっては、音便化しにくい語というのも存在すると思われる。

### ウ音便と非ウ音便の使用傾向

熊谷直実・北条時政・源義仲の三人の音便使用の対象者と使用場面について見てきたが、その結果次の使用傾向が  
うかがえる。

#### 熊谷直実

1、熊谷は息子などの自分の身内に対してや、自己の心情を表わす際にウ音便を使用する傾向がある。

2、非ウ音便は敦盛に対して一例用いており、それは敦盛に対する畏まりの表現と取れる。

#### 北条時政

3、北条時政は自己に対する評価や心情を述べる際にウ音便を用いたり、自分の身内の者に命令する時に音便を



用いる傾向が見られる。

4、自己の心情の強調を表わすために**非ウ音便形**が用いられている。

#### 源義仲

5、義仲は腹心の家来で乳母子である今井兼平に対する会話文の中で**ウ音便**を使用している。

6、**非ウ音便**は願書を書かせる場面において、「必ず勝つ」という強い決意を表わすために用いられている。

#### 五、まとめ

平家方と源氏方のそれぞれの西国出身者、東国出身者の音便の使用数比較の結果は次の通りである。

ウ音便	非ウ音便
平家西国出身 96例	38例
平家東国出身 7例	4例
源氏西国出身 18例	18例
源氏東国出身 22例	6例

平家方はウ音便96例に対して、非ウ音便38例とウ音便優勢という結果であり、先に述べたロドリゲスの『日本大文典』における指摘に当てはまるものである。一方、源氏方東国出身に代表されるように、東国出身であってもウ音便が見られるという結果も明らかになった。東国出身の人物であってもウ音便形が見られる点については、覚一本を書写させた明石覚一検校（播磨国出身）の言語の問題と関わってくる問題であろうし、その点についても考えなければならぬであろう。また、柳田征司氏は『日本語の歴史1 方言の東西対立』（武蔵野書院、二〇一〇年）において、東国系

の抄物にウ音便が多く認められることから、室町時代末期の東部方言はウ音便と非ウ音便を併用していたのではないかと述べている。柳田氏の考えによれば、鎌倉時代においてもそれは同じだったのではないかということである。

ウ音便と非ウ音便の使用場面については以下の傾向があることが分かった。

一族郎党といった身内の者、または親しい者に対してはウ音便形を用いる傾向が高い。また、自己の心情を述べる際にもウ音便が使われていることが多い。一方、非ウ音便形は、身分的に上位の者に対してや、畏まった状況下で使われていることが分かった。また、非ウ音便形は強調という意味でも使われているようである。例えば、命令表現を強調する際などである。加えて、一部では漢文訓読調の文とともに使われていることも確認できた。このように非ウ音便形は、強調という意味と、天皇や法皇といった身分的上位者に対しての改まった態度、緊張を表す表現として用いられていると言えるであろう。

最後に、今後の課題として次のようなことが挙げられる。

『平家物語』中に登場する人物（源頼朝、熊谷直実など）には、次のような書状などの直筆文書が現存する。

あみだにほんぐわんよりほかにせいもんどもをくまし□す。

（熊谷直実直筆誓願状 第一通 2）<sup>10</sup>

これらの古文書との関わりも論じる必要がある。また、今回は形容詞の音便形に絞っているが、動詞の音便についても分析を行う必要がある。そして今回使用した本文は語り本系の覚一本であるが、他の諸本についても分析し、諸本ごとにどう違うのかということも明らかにしていきたいと思う。

## 注

(1) J・ロドリゲス原著、土井忠生訳註『日本大文典』三省堂、一九五五年

- (2) 確実とは言いがたいが、「中年迄播州書写山の僧たり」（『西海余滴集』）という伝えが存する。（『日本古代中世人名辞典』（平野邦雄、瀬野精一郎編 吉川弘文館、二〇〇六年））
- (3) 各登場人物の生没年、出身地、経歴等は次の資料を参考にした。  
『国史大辞典』（吉川弘文館、一九七九年）
- (4) 『平家物語を知る事典』（日下力、鈴木彰、出口久徳編 東京堂出版、二〇〇五年）  
『日本古代中世人名辞典』（平野邦雄、瀬野精一郎編 吉川弘文館、二〇〇六年）  
『平家物語大事典』（大津雄一、日下力、佐伯真一、櫻井陽子編 東京書籍、二〇一〇年）  
『平家物語大事典』（大津雄一、日下力、佐伯真一、櫻井陽子編 東京書籍、二〇一〇年）
- (5) この他にも、「邊地粟散」、「解脱塵相」、「破戒無慙」といった漢語が同じ台詞中に見られる。
- (6) 壇之浦合戦の後、捕えられた宗盛が息子の副将と再会する場面で見張りについていた武士。
- (7) 捕えられた重衡の見張りについていた武士。
- (8) 物語中の義仲は、次に示すような都人から田舎育ちゆえの振舞いの無作法さや、言葉遣いを揶揄される描写がある。  
…木曾対面して、先御返事を申さで、「抑わどのを鼓判官といふは、よろづの人にうたれたうか、はられたうか」とぞとふたりける。知康返事にをよばず、院御所へ歸りまい。て、「義仲おこの者で候。只今朝敵になり候なんす。いそぎ追討せさせ給へ」と申ければ：  
(巻八「鼓判官」一五二頁)
- (9) また、形容詞の音便形についてはないが、『お国ことばを知る 方言の地図帳』（佐藤亮一監修、小学館、二〇〇二年）によれば、現在の木曾地方のハ行四段動詞の音便形は、単語によりウ音便と促音便が見られるとされている。なお、同書は『日本方言大辞典』（全三巻・小学館刊）をもとに作成されたものであり、現代方言に基づいている。
- (10) 『平家物語下』（日本古典文学大系 岩波書店、一九六〇年）四〇六頁、注八。  
金子彰・東京女子大学日本文学学科有志「熊谷直実直筆誓願状 語彙総索引稿」『東京女子大学日本文学』第百号（二〇〇四年三月）

（東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科在籍）

キーワード

覚一本『平家物語』、形容詞のウ音便と非ウ音便、言語の東西